

N1 第 39 课 古典文学爱昆虫的千金 1（课文）

たいていの女性^{じょせい}は、毛虫^{けむし}なんか大嫌い^{だいきら}。桜^{さくら}の木^きから毛虫^{けむし}がポトッと肩^{かた}の上^{うへ}にでも落ちて^お
こようものなら、ギャアと恥^{はじ}も外聞^{がいぶん}も忘れて^{わす}て大声^{おおこえ}でわめく。でも、あの毛虫^{けむし}を手^てのひらにのせ
愛撫^{あいぶ}してじっと観察^{かんさつ}する姫君^{ひめぎみ}がいました。それが、「虫めづる姫君^{むしひめぎみ}」の主人公^{しゅじんこう}。実在^{じつざい}の人物^{じんぶつ}を
モデルにした話^{はなし}といわれています。この姫君^{ひめぎみ}は、当時^{とうじ}の人々^{ひとびと}から**はもちろんのこと**、後世^{こうせい}の読者^{どくしゃ}
からも変人^{へんじん}扱い^{あつか}され、あげくのはては、その変態^{へんたい}ぶりに「萎黄病^{いおうびょう}」という病名^{びやうめい}まで付^ふして病氣^{びやうき}
の烙印^{らくいん}を押^おす人^{ひと}もいます。

（山口仲美『日本語の古典』岩波書店による）

大部分女性都特别讨厌毛毛虫。毛毛虫从樱花树上掉落到肩膀上，（女性们）马上就会大声尖叫，忘了羞耻和体面。不过，有一位大户人家的小姐，会把毛毛虫放在手上爱抚，还目不转睛地观察。那就是“喜爱虫子的大小姐”的主人公。据说是以真实的人物为原型的故事。这位大小姐不仅被当时的人们，还被后世的读者看作是怪人，最终，还有人给她附上了一个“萎黄病”的病名，给她的变态打上了烙印。